説教20201101二コリ4：16-5：10 　讃美歌　321　431　352

「命にのまれて」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

今日は多くの方々がこの会堂に集められ、祝福の時をともに過ごすことが出来ます恵みに感謝します。私たちをここに集めてくださったのは主なる神である、イエス・キリストです。イエス・キリストは私たち、そして今はこの世を去られた人たち一人一人の主なる神です。イエス様は今は、見えなくされていますが、終わりの時には、私たちは彼の顔をはっきりと見ることが出来るようになります。

　さて、今は私たちに見えなくされているそのイエス様に会うために私たちは今ここに集っています。ではイエス様の言葉を聞きましょう。ここに別府不老町教会の今年の年間聖句が掲げられています。「わたしが命じるすべてのおきてといましめを守って長く生きる」この「わたし」というのがイエス様ご自身です。イエス様が私たちにこのようにお命じになっているのです。おきてといましめなんて、えらく厳格そうだなと思われるかもしれませんが、確かに、皆さんご存じかと思いますが「十戒」というものが聖書には記されておりまして、私たちはこれらのことをしっかり守っていく必要があります。そして最後の「長く生きる」という言葉にイエス様からの私たちへの愛がにじみ出ています。イエス様は私たちがこの世で幸せに長くいきていくことを切に願っておられます。

　又、「長く生きる」というのは、私たち一人一人がばらばらに自分の命を長く全うするという意味だけではありません。「長く生きる」というのは、神様の目から見て、一つ一つの命がつながっていって、ついには一つの大きな命となって完成するということも差し示しています。

　命が受け継がれ、私たちはより大きな存在に生かされていくという考え方は古くからの日本の物語でも多く物語られています。

例えば「ももたろう」という昔話があります。おばあさんが川から拾った桃を切ろうとしたら、桃が自然に割れて中から男の子が飛び出して来ました。。桃太郎と名付けられた男の子は見る間にすくすく育ちましたが、一言も口を聞きませんでした。ある日、桃太郎は「鬼退治に行く」と言って、きびだんごを持って鬼退治に出かけました。道中、犬と猿とキジを家来にした桃太郎は鬼の住む鬼ヶ島に上陸し、酒盛りしていた鬼たちをやっつけて、彼らを見事に退治し、奪われていた宝を取り戻して村に帰りました。それからおじいさん、おばあさん、桃太郎は何不自由なく仲良く暮らしました、めでたしめでたし、というのが大概の昔話の落ちになります。が、このようにして自分たちの幸福が次の世代に受け継がれていくことを祈ったのだと思います。

　今から５０年くらい前は、確かにこの様な物語が親から子へと受け継がれ、私たちは自分たちの道徳観や価値観、そして死生観をはぐくんできたと思います。しかし、今のこの世におきまして私たちは、このように素朴な物語だけで十分なのでしょうか。なにか物足りないのではないでしょうか。

　私たちは、この世を生きていくのに「事実」だけによって生きているのではありません。必ず、事実に加えて、何らかの物語によって生かされています。そしてイエス様は、私たち人間に究極的な物語を物語っておられます。

　私たちの生きるこの世は見えるものと見えないものから成り立っています。いかがでしょうか、周りを見渡してみましても見えるものより、見えないもののほうが多いのではないでしょうか。見えるものは名指しすれば限りがありますが、見えないものは限りがありません。新型ウィルス、ヨーロッパでの流行、そして恐怖、見えないものは限りなく広がっていきます。今は恐ろしい方向にもっていきましたが、聖書には、逆に、喜びや幸せの方向への物語が記されているのです。見えないものが永遠に存続するのは、私たちが永遠に喜びや幸せのうちに生きるようになるためなのです。

　今日の聖書箇所の冒頭に「外なる人」「内なる人」という表現がありますが、私たちは「外なる人」でもあり「内なる人」でもあります。外なる人は、この世において日々衰えてまいります。艱難辛苦に会えば、しわも増えて、髪の毛も抜け落ち、体も弱っていくことでしょう。それは当然の成り行きです。誰も死に至るまでのこのような成り行きを食い止めることはできないのです。

　ですから私たちはぜひ、私たちの「内なる人」に目を注いでいこうではありませんか。内なる人は死んでも死にません。それは今日の説教題にもありますように、死ぬはずのものが命に飲み込まれてしまったからです。そのようにして、すでにこの世を去られた私たちのご先祖も、今なお生きておられます。今日は、その先達たちもここに集められて、共に主なる神のイエス様を礼拝し賛美しているのです。

　ではイエス様は私たちの「内なる人」をどこに連れていかれようとしているのでしょうか。それは「天にある永遠のすみか」へです。その住みかというのは、この世の住みかを幕屋つまりテントに例えれば、それとは反対に堅固な建物です。神の手で作られた永遠に存続する建物です。私たちは、炎も大水も防風も地崩れも壊すことが出来ない、思いもよらないような堅固な建物に、永遠に住むものとされるのです。そしてその時、私たちの「内なる人」もそこに住むにふさわしい清くて幸いな体へと変えられているのです。これは私たちが思いもよらない幸せな物語です。私たちは、時間を超えて、すでに世を去った人たち、そして今この世にある人達、そして、これから生まれてくる人たちと、分け隔てなくその堅固な建物で暮らすことになるのです。

　これは確かに奇想天外な物語といえるかもしれません。しかし、主なる神のイエス様は私たちが思いもしない、まさにサプライズの贈り物を、信じるものに与えてくださいます。

私たちがこの神様の物語を信じることを躊躇してしまうのには、一つの理由があるように思います。それは、この世の艱難辛苦の渦中にあって私たちが、どうしても衰え行く「外なる人」にしがみついてしまうからでありましょう。私たちは、いつまでも若さを保ちたい、衰えていくのは嫌だと思って、今ある「外なる人」にしがみついてしまうのです。そうするとますますわたしたちの「内なる人」はないがしろにされ、見向きもされなくなって、その結果、イエス様の幸せの物語からは遠ざけられてしまい、その結果、ますます幸せ感が失われていくという悪循環に陥るのだと思います。そうなると、この世での死がすべての終わりであるといった絶望的な思いに支配されないとも限らないのです。

　この世での死は、決してすべての終わりではありません。しかし私たちは死ぬ前と死んだ後の違いに思いを馳せますと、その未知なることに対して恐れを抱いてしまいます。それはやむをえないことだと思います。

　今日はそんな私たちに対し、イエス様がどのような慰めと励ましの言葉を投げかけておられるのかを、聞いてまいりましょう。

　今日の聖書箇所の中ほどに「私たちは裸のままではおりません」とあります。裸というのは何らかの比ゆ的な表現ですが、イエス様はこの裸ということで何を言おうとされているのでしょうか。この別府という町はお風呂の街です。いたるところに公衆浴場が立っていて、人々はいわゆる裸の付き合いをしております。私事で恐縮ですが、私も、この４月に別府に来てから、毎日、近所の不老泉に通っています。その風呂の中と、町ナカの様子を対比しますと、一方は裸、他方は着飾った世界であります。その落差はある意味驚くべきものがあります。誰も裸のままでは街を出歩かないのです。人それぞれ、それなりの装いを施して街を歩いているのです。つまり、私たちはこの素肌に着物を一枚一枚重ねてから町に出ていくのです。そして風呂場では一枚一枚その着物を脱ぎ棄ててゆくのです。

当たり前の話をしましたが、この一枚一枚という成り行きに目をとめていただきたいと思います。

聖書箇所に戻りますが、私たちはこの地上の幕屋、テントに在って苦しみ悶えています。そして、それを脱いでも、と続きますが、この脱いでもということに、長い時間の経過の中で一枚一枚脱ぎ捨てていくというイメージを持つとわかりやすいかと思います。私たちは、この世での死に向かって、一枚一枚着ているものを脱ぎ去って行っているようなものです。それは私たちの「外なる人」を脱ぎ去って行っているといってよいでしょう。私たちは外なる人をすべて脱ぎ去って、この世での死の床に就かされます。死ぬるとき私たちは裸です。しかしイエス様は、「私たちは裸のままではおりません」と励ましておられます。そして続けて言います。「それは、脱ぎ捨てたいからではありません、上に着たいからです」と。

つまり私たちが、この世で、この世での健康や誉れや富や名声等を脱ぎ捨てて行く、ある意味、はぎとられていくといっもいいかもしれませんが、それはそうして裸になりたいからではなく、一度裸になってから、その上に又、一枚一枚を重ねて、着飾っていきたいがためなのです。それは私たちの「内なる人」が新たにされていくことだといっていいでしょう。

　こうして、この世での日々の着飾りと、死んでからの日々の着飾りとが断絶したことではなく、死では終わらないひとつながりの出来事であることが知らされています。私たちはこの世にある時からもうすでに「内なる人」の着飾りを始めているのです。私たちの内なる人を着飾って行くとはどういうことでしょうか。それは、私たちが見えないことに目を注ぎ続けて行くことです。まことの終わりの日には私たちは、天から与えられた住みかを上に着せられるようになります。それは神の手で作られた永遠に存続する建物です。その建物に入れられて私たちは永遠に祝福され生かされるのです。

　イエス様は、言われます。「私たちを、このようになるのにふさわしい者としてくださったのは神です」と。つまりこれは私たちが作った物語ではありません。主なる神が私たちにお与えになった物語です。私たちはその信じられないような物語を信じるとき、心強くされます。そしてますます主なる神のイエス様は、私たちの近くにいて励ましてくれるようになります。

　私たちは、この世に在って、悪いことや恐ろしいことを逃れようとするだけでは、まったく前に進むことはできません。逆に、この主なる神からの物語を信じて、私たちの「内なる人」の着飾りを始めるとき、それはまことに力強い一歩一歩を保証してくれます。どうか主なる神のこの福音が私たち一人一人の内側に届いて、私たちが「内なる人」の着飾りを進めていくことが出来ますよう、イエス様の恵みと励ましを願います。

お祈りいたします

今日はこの召天者記念の主日礼拝に、この兄弟姉妹たちを招かれ、御前に礼拝賛美することが出来ます幸いに感謝します。

私たちは、あなたからの幸せの物語によらなければ、まことの幸いに向けて歩むことが出来ません。どうか私たちをあなたを固く信じるものとならせてください。

今、ことにヨーロッパにおいて新型ウィルスによる病が広がりつつあります。どうかあなたが病気に苦しむ方一人一人を慰め癒してください。社会の混乱を沈め、あなたの平和で満たしてくださいますように。

又、ギリシャ、トルコ近海において大きな地震が発生し、多くの方々が被害をうけ、亡くなられました。どうかこの方々があなたの大きな慈しみのうちに守られ、あなたの全きみ旨が成し遂げられますように。

又、日本におきましても今、孤独を感じる人、生活に困難を抱える人、苦しんでいる人たちがおられます。どうか私たちの中心にあなたがおられ、私たちをあなたの愛と平和の内に安らわせてください。

かつてこの別府不老町教会で礼拝した召天者の方々を覚えます。どうか彼ら彼女らが、常にあなたに祝福され、平和の道を歩んでいくことが出来ますように。またそのご家族にも恵みを与え、ついにすべての人々とともに御国を継ぐものとなさせてください。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配されております、私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈り願います。